中国竹紙紀行 2～竹と竹紙を訪ねる旅～

（調査時期　2007 年 4 月）

小林亜里

2007 年 4 月 15 日から 21 日まで中国に行った。これは、所属している竹の研究会「竹資源活用フォーラム」が 10 周年になるのを記念して企画された旅行で、会には竹の研究者や竹の産業に従事する人、竹を使った作家活動をする人、地域活動をする人など、さまざまなアプローチから竹に関わる人がいた。今回は、竹の豊富な中国で、自然、研究、産業、工芸などさまざまな角度から現代中国の竹事情を見て来ようということになった。行き先の中心は東部の浙江省。昔から竹の産地として有名で、現在もさまざまな竹の産業の中心地となっている場所である。また、その省都・杭州は上海から 2 時間の距離にあり、西湖という湖をかかえる観光都市としても知られている。

前回（2005 年）私が個人で中国を訪れた時のイメージは、地の底から沸いてくるのかと思うほど人が多く、人人人人車車車車自転車自転車……と、近代化の混沌とした波の中にある、という印象が強かったが、今回は季節は新緑、場所はマルコポーロに「世界で一番美しく華やかな都市」と言わしめた杭州だったせいか、緑が多く、人も自然もゆったりしていて、予想外にさわやかでリラックスした中国に出会うこととなった。

浄慈寺にて

まず杭州では西湖のほとりに建つ浄慈寺を訪れた。曹洞宗の祖、道元が修行した寺として有名なところだが、ここではある光景を目にすることができた。浄慈寺には熱心な信者の方々も多く参拝しているが、大雄宝殿の前のお線香を立てて拝む場所で、私は竹紙とおぼしき黄色い紙を燃やす信者さんの姿を目にする機会を得た。この黄色い紙は、前に中国に来た時にも仏具屋さんのようなところで束にして売られているのをしばしば目にすることがあり、竹の紙だと聞いたことがあった。

さらには、お盆やお葬式など宗教的な儀式の際に「銭紙」と呼ばれる竹紙を燃やす習慣があると聞いていて、ずっと気になっていたのだが、まだ実際に使われているのを見たことはなかった。今回、線香や護摩を焚くようにして燃やされている黄色い紙を見て、これがその銭紙かとひそかに感動を覚えた。

この浄慈寺については、もう一つ帰国後にわかったことがある。この寺の奥には南屏山の洞居があり、そこに尺八の祖「虚竹禅師」が暮らしていたというのだ。虚竹については、水上勉先生が晩年の著書「虚竹の笛」（親鸞賞受賞）でその人物像に迫っておられる。浄慈寺はかつて日本人の留学僧を多く受け入れており、日本人の留学僧と中国人女性の間に生まれた子が、虚竹となって尺八を日本に伝えたと、水上先生は著書に記している。知らず知らずに、そんなお寺を杭州の旅の最初に訪れたこともまた、竹の旅の少なからぬご縁のような気がして感慨深かった。

竹紙工場見学

旅の 3 日目には杭州から足をのばし、富陽と安吉というところを訪れた。富陽では竹紙の工場を見学した。数十名の作業員をかかえるそこそこの大きさを持つ工場だったが、やはりみな紙漉は手作業だ。水に漬け込んであった竹を煮た後、ミキサーでつぶし（ここだけ少し機械が使われていた）、パルプ状にしたものを水に溶かして水槽のなかで簀を使って手漉きする作業は、2 年前に福建省の竹紙工場で見せてもらったのとほぼ同じである。漉いた紙は重ねて水切りした後、熱板に貼って乾燥させ、手際よく作業が進められていた。

ここでは、日本に輸出するための画仙紙を漉いており、工場の方の説明によると、10 年くらい前は竹紙 100%だったそうだが、今では「木（コウゾか？）と草（リュウノヒゲと言っていた）に竹を 20%くらい混ぜて漉いているとの事。なぜ、竹 100%の紙を作らなくなったのかという質問には「竹がなくなってきたから」との返事をもらったが、それだけが本当の理由なのだろうか。少し疑問も感じた。

工場内の事務室では、「天工開物」とは異なる竹紙づくりを図解した古い文献を所蔵しておられ、それに基づき、作り方のお話を伺うことができた。溜め池への漬け込み、煮込みなど、だいたい「天工開物」と同様だったが、材料の漬け込みの際、動物のおしっこを混ぜていた、とのお話がでたのは初耳だった。アンモニアに繊維の軟化を促進させる働きがあるのだろうか？

いろいろ聞きたいことはたくさんあったが、あっという間に時間が過ぎて、後ろ髪を引かれる思いで工場を跡にした。

研究と産業

竹紙工場の後に行ったのは、安吉の郊外にある中国亜熱帯研究所。ここにはフ・マオ先生という竹の研究者がおられ、現在中国で竹についてどのような研究がされているのか、スライドとともにお話を伺うことができた。亜熱帯研究所では他の植物も研究対象となっているのですが、全体の 3 分の 1 が竹の研究だそうです。竹の生態学的研究から、さまざまな産業など竹の活用に関する研究、食用竹の研究や新しい竹の開発など、産学併せて活発な研究がされている様子がわかった。今回の旅の主催者である「竹資源活用フォーラム」の内村悦三会長は、長年竹の研究に取り組んでこられた方だが、この研究所の 3 分の 1 が竹の研究に当てられていると聞いて、「日本では竹の研究は植物全体の 0.1%くらいしか研究されていないです」と羨望と溜息が混じった感想を述べていらしたのが印象的だった。この日は、竹づくしの忙しい 1 日で、同じ安吉郊外にある竹の資料館も訪れた。中国では雲南省にし

かないという巨大竹（ジャイアント・バンブー）を見たり、緻密に精巧に編まれた竹工芸品の数々を、歴史をたどりながら見ることができた。さすが竹の豊富な国だけあって、数千年の昔から衣食住さまざまな分野に竹が使われている。竹の家やテーブル、椅子、食器、服、靴、楽器、書簡など……。巨大な象の親子のレプリカや細かい文字まで竹で編まれて表現されていたのには、少々あきれるほどだった。

中国で京都に会う

この日の最終訪問地は竹工芸品の工場だった。残念ながらすでに夕方で、工場で作業している様子は見ることができなかったが、びっくりしたのは、ここで扱われている商品のほとんどが、日本のホームセンターや100円ショップで売られているおなじみの竹商品だったことだ。竹の割り箸から楊枝、竹べら、竹ざる、竹籠、小物、大物など、何でもござれという感じ。ここからは週に 1 回コンテナが出荷され、大阪や京都の会社や料理店に荷が届けられるとのことだった。工場を案内してくれた女性社員は、日本語も慣れたもので、日本から来る業者さんとはすっかりおなじみの様子だった。

こうした竹製品のうち、単純なものは、機械化されて工業的に作られているようだが、竹籠など細工物は、やはり手で編んで作られているとのこと。京料理を演出する天ぷらを盛る竹の籠や、小粋な突き出しを入れる竹の容器が、中国の田舎で、中国の職人さんたちの手によって、こうしてせっせと作られていたのかと思うと少し複雑な気持ちになった。

日本では、手作り品は手間のかかる貴重なものとして珍重され、価格も高価である。私が店で扱うものもそうした商品であり、いつも作る人がどれだけ手間と労力をかけてそれを作っているか、お客様にご説明しています。「だから価格が高いのです」と。しかし、ここ中国では、材料やデザイン、作る人による差はもちろんあるとはいえ、同じ手作り品が、とんでもなく安い人件費に支えられ、日本向けに次々と作り出され、送り出されているのだ。更にコストを下げるために、日本の業者たちは工場の担当者としのぎを削り、コスト交渉の結果、工場では同じような品でも、少しずつ仕様を変えて商品が作られているのであった。使い捨て商品としてその安さを要求しているのも私たちであり、一方で高級な手作り品を求めているのも私たちだ。自らの矛盾と今後の方向性を考えさせられるひとときでもあった。

竹床工場

4 日目は、宣興にある竹のフローリング工場を見学した。ここは会のメンバーでもあり今回の旅の手配もお世話いただいた大阪の会社が、中国の会社と合資会社を作っているところだ。孟宗竹を細長く切り、殺菌や乾燥などいくつもの工程を経て、寄せ木細工のように接着してフローリング材を創り上げています。竹のフローリング材は、堅い竹をまっすぐにそろえていくのがむずかしそうだが、合板より堅固でひんやりした感触である。夏は気持ちよさそうだと思ったが、床暖房もできるとのこと。もともと中国国内にも需要があったものと聞くが、今ではアメリカやヨーロッパにも輸出されており、日本向けのものは日本仕様で高レベルのものが作られているとのことだった。

工場内には中国語のスローガンが垂れ幕のようにいくつも掲げられており、工場の人たちにも、これから更に未来に向かって伸びていこうとする意欲が強く感じられた。夜ここの中国側の会社の方々とお食事を共にする機会があった。社長さんはじめ社員の方々が次々に歓迎の乾杯をして歓待してくださり、若い工場長さんが挨拶に回ってこられ「中国人と日本人の心がふれあう機会をもてて嬉しく思う。これからも私たちは対等につきあい、ともに進んでいきたい」と情熱的に話されていたのが印象的だった。

竹海を見る

さて、今回の旅の中で、ことさら楽しみにしていたのが「竹海」見学である。「樹海」という言葉は聞いたことがあるが、日本では「竹海」は見たことも聞いたこともない。竹が海のように連なる光景---それが中国にはあった。

孟宗竹の山林が見渡す限り続いている。その向こうの山も一面竹林、そのまた向こうの山も一面竹林。竹の緑は他の樹木のように濃い色ではないので、淡い緑の山々が見渡す限り続いている。黒竹の竹海もある。こうした光景は浙江省近辺にはいくつもある様子だが、宣興近郊では「竹海公園」として中を散策できるようにしているところもあった。ここを歩いた時の気持ちよかったこと！　庭園的なチマチマした竹林ではなく、荒れ果てた放置竹林でもない、自然の森林に匹敵する竹林散策は、まさに竹林浴そのもの。私はマイナスイオンを全身に浴びて、すっかりリフレッシュして元気になった！

言い添えておくが、こうした中国の竹林は、自然に近い形にみえるが、決して手入れされていない

わけではない。竹海公園の竹にしても、1 本 1 本の竹に目印がついていて、それぞれの所有や竹の状態が識別され、管理手入れされている様子がうかがえた。

中国はやはり竹の豊富なところだ。そして、その竹を利用する割合もまた、今なお大変豊富である。日本の竹がイメージに先行され、ともすればお飾りになりがちなのに比べ、中国の竹は、実際に様々な形で生活に使われているからこそ、生かされ続けているのだと実感した。

今回のご報告も余白が尽きた。最後に、中国のたけのこも旬でとてもおいしかったことを添えて、このご報告を終了することにしよう。　　（2007 年 5 月記）